

3 本校の生徒の分析

1) 入学生からみた本校生徒の分析

平成27年度4月現在、本校に在籍している生徒は、多治見学区(多治見市・土岐市・瑞浪市)からの通学生がほとんどである(708名中の97.6%)。これは、「学区制」が取り払われ「全県募集」となった現在では特筆すべき数字である。

ではその生徒たちは、中学校時代どのような生徒であったかといえば、学習成績面・日常生活面でも「いい生徒」であったであろうことは、高校入試のデータ等から想像するに難くない。実際、多治見高校入学後の彼らの学習活動の姿勢・学校生活態度は、決して悪くない。むしろ良いと言っていい。学習にも真面目にコツコツと努力し、部活動でも一所懸命練習する姿が多く見られる。

その一方で、中学校からの書類をみると、中学校時代に「級長」や「部長」・「主将」といった「リーダー」的な存在であった生徒はそう多くはない。本校の生徒は決して突出して目立つことはないが、中学校時代は学習面・生活面である程度上位におり努力をしてきた生徒たちであろう。それは、本校がこの地域の「二番手校」(公立7校・私立3校中)であることが影響しているだろう。そのことに加えて、いろいろな工夫をしながら積極的に生徒募集をしている名古屋地区や県内の私立高校へ、多治見学区から優秀な生徒が流出してしまっていることも、少なからず影響していることも否めない。

2) 本校生徒の意識と課題

ここで、平成14年に日本経済新聞に掲載された世界各国の高校生の意識調査【表1】及び平成23年に読売新聞に掲載された世界各国の高校生の意識調査【表2】と多治見高校生(平成26年度2年生)【表1、2】を比較した結果を分析する。これにより、自己意識に関するアメリカ・中国・韓国の高校生と日本の高校生の違い、さらに日本の高校生と本校生徒の違いが顕著になる。

以前から、日本の高校生は欧米・中国・韓国の高校生と比較して、「自分に自信がない」「自分に誇りが持てない」という者が多いと言われ問題視されてきた。本校の生徒もこうした「自己効力感」(自信)に関して、「誇りが持てない」以外では同様の傾向を示していることが分かる【表1】。一方、「自己有用感」(役割意識)に関する調査では、本校生徒は世界各国の高校生と比較すると50～80ポイントも低く、日本の高校生と比較しても10～20ポイント以上低いという実態が明らかとなった【表2】。

	日本	米国	中国	2年
自分がだめな人間だと思ふことがある	73	48	37	64
計画通りやり遂げる自信がある	38	86	74	17
誇りに思えることがない	53	24	23	23

【表1】日本・米国・中国の高校生の意識調査

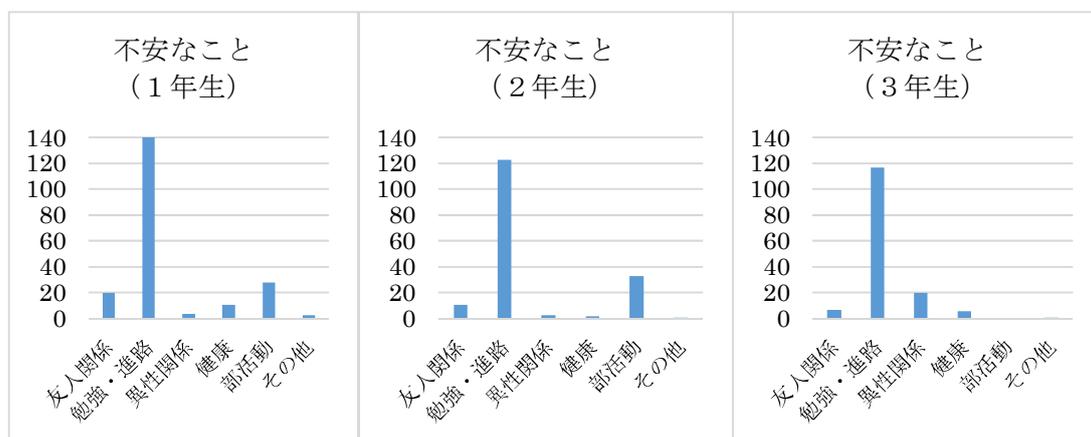
	日本	米国	中国	韓国	2年
私は価値がある人間と思ふ	36	89	88	75	22
私は自分に満足している	25	78	69	63	9
親は私が優秀だと思っている	33	91	77	64	9

【表2】日本・米国・中国・韓国高校生意識調査

次に多治見高校生は、どのような事柄に対して自信や誇りが持てずに悩んでいるのかについて検討する。

平成27年11月に本校で実施したアンケート結果によると（【図1～3】）、「勉強・進路」について自信がないという生徒が学年進行につれ漸減するものの大多数を占めている。これらから「多治見高校生」が3年間を通じて学習に対して主体的に取り組めておらず、3年間の高校生活の中で成績が伸びているという実感が持てない。その結果「進路に不安を感じる」という生徒が多いということが想像される。一方、模擬試験の結果などから分析すると各自それぞれ成績は向上している。にもかかわらず勉強・進路に不安を感じているということは、生徒一人一人に「自己を正しく見つめ、評価する」といった「自己肯定能力・自己評価能力」が十分に育っていないということも伺い知ることができる。

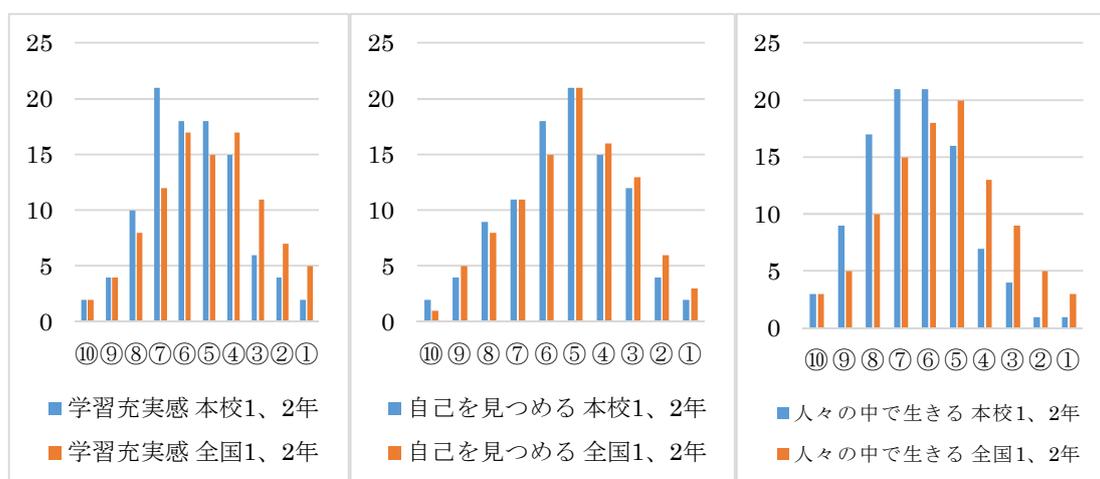
また、本校の生徒は「友人・異性などとの人間関係」は安定しており、部活動を含め学校生活全般には、それほど不安を抱いていないということも言える。その一方で、仲間から離れ一人になって自身を見つめたとき、個人の力が育っていないことが実感されているのではないかと想像される。



【図1】

【図2】

【図3】



【図4】

【図5】

【図6】

※ 各指標の棒グラフ右が「本校1,2年」、左が「全国1,2年」。

※ ①から⑩の指標は数字が小さくなるにしたがって後退を示す。

さらに、こうしたことは平成26年度・27年度に実施した「Σ検査」の結果【図4】～【図6】にも顕著に表れている。本校生徒は総じて、全国の高校生に比べて「学習についての充実感」が低く【図4】、自己肯定感が低い【図5】のがよくわかる。さらに、「人々の中で生きる」ことが苦手であるという項目が全国平均を大きく上回っている【図6】。これらを総合的に分析すると、「学習に関する自信のなさが根拠となって自己効力感や自己有用感を実感できない。このために人前でリーダーシップを発揮し、外へ発信していく力が弱い（苦手）」という多治見高校生像が浮かび上がってくる。

このような観点から、まず本校生徒にいろいろな場面でわれわれ教師や保護者が「誉めて」・「認める」ことで、「自信」を持たせることが大切であることが分かる。そのためには、第一段階としては小さなグループ（班など）でリーダーシップを発揮できる場をつくり、第二段階としてはクラス内での発表の場を通して「表現力」（プレゼンテーション能力）を育成し、第三段階としては学年や全校生徒に向けて、自分たちの考えをアウトプットしてゆく能力を身に付けさせていくことが肝要であると考えます。そのためには、アクティブ・ラーニングを、本校でもいち早く取り入れ、実践していく必要がある。

（文責：三浦）